

博物館 Dictionary No.246

～あなたに語る・時代を超えて生きる心～

てんじ 展示中の作品について、研究員がわかりやすくかいせつ 解説します。

とう とうよう 唐時代の陶俑

古代中国では、人が亡くなつたあとも、生きていたときと同じような暮らしができるようにと願い、お墓の中にさまざまな品物を入れました。これらは「明器」と呼ばれ、人や動物、家具などを土や木で作りました。それらは「俑」と呼ばれます。俑をお墓に入れる習慣は古くから続き、中国の長い歴史の中で受け継がれてきました。そのため、各時代の人たちの服装や髪型、生活の様子がよく表されているため、昔の暮らしを知る大切な手がかりになっています。

とう 唐時代(618-907年)、中国は「シルクロード」という交易路(物を売り買いするための道)を通じてアジアやヨーロッパの国々と盛んに交流していました。首都の長安には多くの外国人が集まり、さまざまな文化が行き交う国際的な都市となっていました。そのため、とう 唐時代の俑には中国の人だけでなく、外国の人や動物も数多く表され、また形もとてもリアルで、美しく色づけされたものが多く作られています。その代表的なものがラクダ(駱駝)のよう(図1)です。ラクダ(駱駝)は「砂漠の船」とも呼ばれ、広い砂漠を旅する商人たちの荷物を運びました。シルクロードの交易を支えた大切な動物であり、中国では富や繁栄の象徴と考えられていました。駱駝俑は、こぶや毛並みまで細かく作られており、当時の人々が異国の文化に強い関心を持っていたことが伝わってきます。



図1 さんさいらくたよう 中国 唐時代(8世紀)
京都国立博物館蔵

また、唐時代のお墓からは、外国人を表した俑も見つかっています。彫りが深く、大きな目をしており、高い鼻であごひげをたくわえた中央アジアの人々（中国では胡人と言われました）の特徴をよく表した胡人俑（図2）が代表的ですが、なかには「崑崙奴」と呼ばれる東南アジア系の人々を表したもの（崑崙俑）があります。崑崙俑（図3）は、巻き毛や大きな目、太い眉、裸足の姿などが特徴で、唐時代のお坊さんが7世紀後半にインドおよび東南アジア諸国を旅して、見聞きしたことを書いた『南海寄帰内法伝』という本に書かれた崑崙人の特徴と重なります。彼らは唐時代の首都である長安（現在の陝西省西安市）に連れてこられ、動物の世話や船の仕事、音楽の演奏などを行っていました。当時の貴族たちは、崑崙奴を自分のもとで働かせることを富や地位の象徴と考えていたようです。

崑崙俑の中には、片手を高く上げて楽しそうに踊る姿のものもあります。その生き生きとした表情や動きからは、唐の人々が外国の文化を受け入れ、交流を楽しんでいた様子が感じられます。これらの俑は、唐が平和で活気に満ち、多くの国々とながっていた時代であったことを今に伝えています。

（工芸室 降矢哲男）



図2 三彩胡人俑 中国 唐時代（8世紀）
京都国立博物館蔵



図3 加彩崑崙俑 中国 唐時代（8世紀）